

第11回 ICTSM (交通調査手法に関する国際会議)

11th International Conference on Transport Survey Methods in Estereel

石井良治¹ 茂木 渉²

By Ryoji ISHII and Wataru MOGI

1 はじめに

ICTSM (International Conference on Transport Survey Methods) は交通調査手法に関する国際会議であり、第11回目の会議は2017年9月24日～29日に、カナダのケベック州のエステレル(モントリオール近辺)で開催された。本稿ではその概要を報告する。

2 ICTSMの概要

第11回のICTSMのテーマは“the era of big data: facing the challenges”であり、各セッションにおいては、ビッグデータ時代における交通調査のあり方が話題の中心となった。

ICTSMの特徴は、開催場所が郊外の宿泊施設であり、都市から隔離された空間において、6日間泊まり込みで集中的に議論をする点にある。また、各日のセッション後には懇親会やモントリオール市内への視察等のイベントが組まれ、参加者同士の情報交換が活発に行われる会議である。

(1) プログラム

第11回のICTSMでは、全体討議やポスターセッション、ワークショップ等の様々な形式で発表、議論が行われた。特に、ワークショップは会議の目玉であり、1グループ10～15人程度の少人数で、同一のテーマに対して、計6時間集中的に議論を行うものである。

(2) 参加者の傾向

第11回のICTSMの参加者は全部で150名程度であり、全体の約6割は大学関係者、残りの4割が行政やコンサルタント等の民間企業であり、実務者の参加者が多い会議である。また、欧米系の参加者が多く、アジア等のその他の地域の参加者は少ない傾向にある。



写真-1 ポスターセッションの様子



写真-2 モントリオール市内の様子(パークレット)

(3) ワークショップ

ワークショップは、表-1に記載の全16セッションが設けられ、各参加者2つのセッションを選んで参加する形式となっている。当研究所が参加したセッションの内、2つのセッション(A5およびA6)に関して詳述する。

セッションの「A5:ビッグデータ時代における交通実態調査の必要性」は、全体テーマとの関わりが深い内容であり、日本のパーソントリップ調査に類するHTS (Household Travel Survey) の必要性に関して議論が交わされた。国によって交通実態調査の調査方法や調査規模等が異なるものの、取得した行動データから行動モデルを作成した上で将来を推計し、交通政策の

方向性を考えることが、HTSの意義の一つであることがワークショップの場で確認された。一方で、ビッグデータの活用に関しては、現況の実態把握データとして積極的に活用すべきという参加者が多いものの、データの作成方法がブラックボックスである点や個人情報保護の観点等から、活用に慎重な姿勢をみせる参加者も一定数いた。

今後の展開としては、スマートフォンのGPSから、属性別の詳細な行動データが取得されるようになることで、紙やWEBによる調査は不要になるという意見

を述べる参加者もいた。しかし一方で、HTSの意義の一つは将来を推計するための行動モデルを作成することであるため、世帯や個人属性や各行動の目的等を正確に把握することが重要であり、今後も行政が適切に調査を実施しデータを取得していくことが必要という意見も多数出された。また、正確なデータを取得する方法として、訪問や電話による調査の実施やインセンティブの与え方等についての議論も交わされた。

別のセッションの「B6:調査の回答率を高めるための工夫」では、調査への参加を高めるため、調査へのゲーム性の導入が検討された。ゲーム性の導入は、調査に対するインセンティブが過剰に働くことにより、本来の行動とは異なるデータが収集される可能性が高い懸念がある。ワークショップの場においては、上記の課題をふまえて、参加率とデータの品質のバランスを考慮した調査ゲームアプリの設計や、調査を実現するためのゲーム内容やアプリ開発の工程、制作コスト等、実現に向けた具体的な内容が短時間で集中的に議論された。

表-1 ワークショップにおけるテーマ

A1	態度や認知に関する測定方法
A2	新たな調査デザインの方向性
A3	スマートフォンとGPSを用いた交通行動の新たな把握手法
A4	ICカードデータ：公共交通のための新たな分析手法と実装
A5	ビッグデータ時代における交通実態調査の必要性
A6	交通調査における代表性の考え方
A7	サンプリングと調査対象者抽出に関する新たな方法
A8	調査における”真値”
B1	ソーシャルメディアを用いた交通データの新たな収集方法
B2	交通調査が交通行動に及ぼす影響
B3	自動的に取得されるセンサーデータの利用可能性
B4	WEB調査手法：課題に対する新たな知見
B5	外出しない人や調査無回答者の問題
B6	調査の回答率を高めるための工夫
B7	データフュージョン：新たなデータが登場する中でのニーズと課題
B8	長距離の移動や頻度の低い移動に関する調査方法

3 おわりに

ICTSMは、ワークショップにおいて少人数で集中的に議論をするため、各参加者の事情や意見が把握でき、日本以外の状況を詳細に知ることができる有意義な会議であった。特に、ビッグデータと交通調査の関係については、各参加者が現在進行形で検討を進めているところであるため、継続的に参加し情報収集をすることが重要だと感じた。

参考文献

- 1) ISCTSC 11th International Conference on Transport Survey Methodsウェブサイト, <http://www.isctsc2017.ca/>



写真-3 ワークショップの様子